

こんにちは！今回は、日本の陸上界に新風を吹き込んだ女性アスリートのお話をしたいと思います。それは、昨年大河ドラマ「いだてん」で菅原小春さんが演じた、日本人女性初のオリンピックメダリスト人見絹枝です。

人見は、明治40年（1907）1月1日に現在の岡山市に生まれました。高等女学校を卒業後、日本女子体育大学の前身である二階堂体操塾で体育を学び、陸上競技に打ち込みます。しかし、当時は女性が競技スポーツをすることにまだ偏見のある時代でした。

その後、人見は大阪毎日新聞社に入社し、運動部の記者として働くかたわら陸上競技を続け、昭和3年（1928）の夏、アムステルダムで開催された第9回オリンピック大会に、21歳で日本選手団ただ一人の女性として参加しました。実は、それまでの大会で女性の参加が許された競技は、ゴルフ・テニス・アーチェリー・フィギュアスケート・ダイビング・水泳・フェンシングだけでしたが、この大会から陸上と体操が加えられたのでした。

そして、人見は女子800メートルで日本人女性として初の銀メダルに輝いたのでした！



人見絹枝  
（人見絹枝『最新女子陸上競技法』、国立国会図書館デジタルコレクション）

帰国後、人見は東北から関東地方の各地を女子選手の指導と講演のため、1か月余にわたり巡回します。その最初の訪問地は青森市でした。

昭和3年11月1日、青森駅に到着した人見を多くの市民が出迎えました。

翌日は、まず午前中に合浦公園グラウンドで、青森女子師範学校、青森高等女学校、協成高等女学校の生徒約80名に短距離走と走り幅跳びを指導しました。

午後は女子師範の講堂で講演会が開かれ、中等学校の子女生徒とスポーツファンに向け、日本人女性として初めてオリンピックに出場した重圧や受賞の感激、また女子競技の将来に対する希望などを語りました。夕方には次の盛岡へ出発するという慌ただしい日程ではありましたが、女子生徒たちには強い印象を残したことと思います。

また、青森市の女子生徒について人見は次のような感想を述べています。思っていたより陸上競技が進歩していて驚いた。ただ、スカートでは思う存分走れないので、いずれ服装は改めていく必要があるが、女子の競技が発達していく過程で自然と改良されていくだろう。

さらに、今の日本では、外国のように女性が選手生活を送ることは難しいが、せめて学生時代だけでも競技に打ち込めるようにしたいものだ、とも話しています。それはおそらく、オリンピックで出会った欧米の女子選手らが、結婚や出産後も競技生活を続けていることを知り、こうした思いを抱いたのではないのでしょうか。

人見は、その後も陸上競技を続け、女子選手の育成にも力を注ぎました。しかし、銀メダルからちょうど3年後、病気のため24歳の若さでこの世を去ったのでした。

※今回は『東奥日報』記事および自叙伝『人見絹枝「炎のスプリンター」』（1997年 織田幹雄・戸田純編集）を参考にしました。